

# 時代の流れとともに

常 楽 武 男

1950年代～80年代は、戦後日本産業の大きな変換期であった。そのころ富山農試では、ニカメイチュウ、ツマグロヨコバイ、ウンカ類など、稲作害虫の発生予察と生態・生理・防除関係を中心に害虫の試験研究を展開していた。私もその一員として、北陸病害虫研究会に参加させてもらっていた。

## 発生予察技術の進展

そのころの北陸病害虫研究会報をみると、「ニカメイガ予察式の再検討 1～5報, 10～15号, 1962～67」や「ツマグロヨコバイに対する積雪の影響, 22号, 1974」, 「ツマグロヨコバイ初期発生量と盛期発生量との関係, 24号, 1976」, 「セジロウンカ初期飛来状況および増殖期気象と被害期発生量との関係, 22号, 1974」といった報文が記録されており、懐かしく思う。

これらの試験研究によって、ニカメイチュウ、ツマグロヨコバイ、ウンカ類など、富山県の主要稲作害虫の発生予察技術がしだいに確立されていった。

## 省力防除技術の開発

一方、「流入施薬に関する研究 1～8報, 12～17号, 1964～67」という報文もあり、時代の変遷を思う。

当時、農業近代化の一つの焦点であった農作業の省力化の一環として、富山農試あげて「肥料・農薬・除草剤の流入施用に関する研究」という、総合助成の開発研究を実施していた。水田にはかんがい水が必ず流し込まれるのであるから、このかんがい水の運動を利用して肥料・農薬・除草剤を稲体まで運ばせることは、きわめて有利な省力化の一手段である。この技術の農薬部門が流入施薬であった。特に農薬の場合は、田面に処理した粒剤などの薬剤が、稲体散布したそれに劣らぬ効果を発揮する場合のあることは、すでに明らかになっていた（「粒状殺虫剤田面処理の効果と使用法 I～VI, 9～12号, 1961～64」）。

流入施薬は、粒剤などの田面処理法をさらに発展させ、散布労力をかんがい水の流水エネルギーに肩代わりさせて、田んぼに足を入れなくて大面積の集団防除を行なおうというのがそのねらいであった。この流入施薬防除は、ニカメイチュウやウンカ・ヨコバイ類で実用的効果が確認できた。そうして、富山県の病害虫防除指針にも登場した。

## 時代の変換期

ところが、時代が動いた。1970年、大阪万博のキャッチフレーズとして世界に発信された「進歩と調和」という、時代をリードする言葉にしばれた。戦後復興を目指して「進歩々々・成長々々」で走ってきた日本人にとって、「調和」という言葉は初めて聞いた新鮮な言葉に感じたものだった。ちょうどそのころ、「進歩・成長時代」の弊害が次々と表面化した。富山の神通川流域のイタイイタイ病と水田のカドミウム残留、熊本や新潟の水俣病と水銀残留などをはじめ、「農薬公害」などという忌まわしい新語まで登場した。

1970年12月の国会は、いみじくも、いわゆる「公害国会」と名付けられ、環境関係の法案がいろいろ付議された。その中で農薬取締法の改正案も付議され、特に農業生産の安定だけでなく、新たに国民の健康の保護と生活環境の保全に資することが、法の目的に加えられた。

流入施薬で水田に農薬を流し込む技術を開発していた私たちは、このような時代の進展に、身の細る思いであった。

その後、1971年7月に環境庁が新設され、農薬取締行政の一部が同庁に移管されるなど、農薬に対する考え方、使用法とも、一時代を画する状況となった。

時代の流れとともに浮沈した私たちの研究時代の思い出を、北陸病虫研報に記録されている報文から、背景も交えて振り返ってみた。